

PICK UP MOVIE



息子のまなざし

[2002年/ベルギー=フランス/103分]

監督・脚本：ジャン＝ピエール&リュック・ダルデンヌ

出演：オリヴィエ・グルメ、モルガン・マリヌ、ほか

“人を受け入れることから、愛が生まれる。”

何故？何故？謎が明らかになる、その瞬間の衝撃。

そして、映画史に残る、最も慎み深く感動的なラストシーン。

生涯忘れ得ぬ感動が 深く心に刻まれる。



[あらすじ]

オリヴィエは職業訓練所で大工仕事を教えている。ある日、その訓練所にフランスという少年が入所してくる。フランスは大工のクラスを希望したが、オリヴィエは手一杯だからと断り、フランスは溶接のクラスに回される。しかし、オリヴィエは人に気づかれぬよう、フランスを追う。フランスとは誰なのだろう？何故、オリヴィエは訓練所の廊下、街角、ビルの中までフランスを尾けるのか？何故、オリヴィエはそんなにもフランスに興味を持つのか？何故、オリヴィエはそんなにもフランスに怯えるのか？成長していく上での指針を持たずに育ってきた少年フランス。少年は目指すべき大人を知らず、自分を受け入れてくれる人を無意識のうちに求めていた。ある事件から心を閉ざしてしまったオリヴィエ。彼は他人を受け入れることができなくなっていた……。

[上映日程] 4/17~30 (休映：4/19、26)

[鑑賞料金] 特別鑑賞料金 (一般) ¥1,500

映劇会員一律 ¥1,000 (年パス不可)

*回数券、福利厚生券、招待券、MTAチケット及び一切の割引サービスが利用できません。

人は、赦すこと、 立ち直ること、ができるか？

この映画については、何も書かない方がいい。事前の情報など得ずに、ただ作品に浸ってほしい。そんな、自分の仕事とは相容れない思いにかられ、しばしば筆を止めた。人の内面の行く先の見えぬ葛藤を、これほど深く細かく描き出した作品は、まれだと思うからだ。だからここでは作品の輪郭にそっと触れるだけにした。

画面にはのっけから男の後頭部あたりが大写しになる。カメラはその肩越しに覗き込むように男の視線の先を追う。男がどんな場所にいるどんな人物なのか、そんな説明的なカットなどなしに、カメラは男の動きを追い続ける。男はせわしく動き回り、落ち着きなくあちこち目を配る。不安、苛立ち、おののき、が伝わってくる。だいたいぶたって、一言の簡潔なセリフから、男には思わぬ過去があり、抑えきれぬ怒り、悲しみ、苦しみを押し殺して生きてきたことが分かる。

男は訓練校の木工の教師だ。そこに新入生の少年がやってくる。二人にはただならぬ因縁があったのだが、少年はそれを知らない。彼らのあたりまえの日常を追うなかで、男の心が、少年の小さな所作ひとつひとつに激しく波立つさまがうかがえる。

男は少年に復讐することもできたがそれはしなかった。少年は苛酷な事実を知ったあと、そこから逃げ出すこともできたが、それはしなかった。

人はどのように自分の中の怒りや憎悪に向き合うのか。自分が犯してしまった過ちから、どのようにして立ち直っていくのか。神や宗教に頼ることなく普通の人々がそれをするのは、未来につながる細い糸を、切れないように気をつけつつ日々手繰りよせるのにも似た、とても難しい業なのかもしれない。この作品の唐突な終幕は、それでも人には赦す力、立ち直る力がある、と示唆しているように思える。

tamura shizue

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。